

《文献目録》

ローザ・ルクセンブルク文献目録

田 村 雲 供

凡 例

- 1 この文献目録は、ローザ・ルクセンブルクの著作（単行書）・著作集・評伝・及び日本でとりあげられた著作・関連諸文献を収録した。なお、諸外国で発表されたルクセンブルクの関連論文については一応手元に集めたが、Nettl Peter: Rosa Luxemburg, vols. 1, 2, Oxford, 1966. のうちvol. 2. に、より、完全な‘Bibliography’が収録されているので、ここには記載しなかった。
- 2 日本における、ローザ・ルクセンブルクの著作・関連文献は、次にあげる書誌より収録した。収録年代は、大正初年より昭和41年までである。
 - 1 神戸高等商業学校商業研究所編纂『経済法律 文献目録（大正5年—大正14年）』宝文館、昭和2年。
同上、第二輯（大正15年—昭和5年）宝文館、昭和6年。
 - 1 天野敬太郎編『法政経済社会 論文総覧（—大正15年6月）』刀江書院、昭和2年。
同上追篇（大正15年7月—昭和2年12月）刀江書院、昭和3年。
 - 1 神戸高等商業学校商業研究所編『国民経済雑誌』（最近の経済学界）大正14年第39巻より昭和20年第77巻第3号まで。これを最後に戦争のため定期刊行休止。戦後昭和21年9月の第78巻第1号をもって復刊。これより昭和23年79巻4号まで。
 - 1 大阪市立大学経済研究所編『戦後社会科学文献解説』昭和22年—昭和27年6月。
 - 1 『経済学文献解題』昭和28年—昭和29年。
 - 1 『経済評論』（経済学文献月報）昭和30年4月—昭和31年4月 日本評論新社。
 - 1 経済資料協議会編集『経済学文献季報』昭和31年1月—昭和41年7月 有斐閣。
- 3 文献の配列は目次のごとくであるが、内部配列は発行年月の順に記載した。すべて語法は、記載されていたままに収録した。
- 4 単行書は、著者名、書名、発行所、発行年の順で論文は、筆者名、論題名、誌名、巻号、発行年月の順で記載した。

目 次

I はじめに

II ローザ・ルクセンブルクの著作

Ⅲ 日本における関連論文

- a ローザ・ルクセンブルク
- b ドイツ社会民主党
社会民主党
K. カウツキー
E. ベルンシュタイン
- c 社会主義・労働運動
- d 社会民主主義
- e ドイツ革命
- f ドイツ事情一般

Ⅳ おわりに

I はじめに

ローザ・ルクセンブルク (Rosa Luxemburg, 1871—1919) は、余剰であった。

第2インターナショナルの中心勢力であったドイツ社会民主党は、試練の年1914年にシュトゥットガルト大会 (1907年)、および、バーゼル臨時大会 (1912年) での反戦決議をあえなく放棄し、組織上の分裂⁽¹⁾を重ねながらも現実的には修正派の指導下に右傾化の一途をたどってゆく。

他方、1917年ロシアに社会主義革命が勃発し、プロレタリア独裁がはじまるとともに社会主義運動には2つの流れが形成された。すなわち、共産主義と社会民主主義との分裂・対立である。

世界歴史の上に一大エポックを画した戦争と革命の時代に生きたルクセンブルクは、正統をもって任じたドイツ社会民主党の指導者、ベルンシュタイン (Eduard Bernstein 1859—1922)、カウツキー (Karl Kautsky, 1854—1938) に代表される修正主義 (Revisionismus) に対する闘争を容赦なく行ったがゆえに、かつ1918年11月9日に勃発したドイツ革命が、シャイデマンの独断⁽²⁾をバネに社会民主党修正派の基盤の上で展開するのに対し、プロレタリア革命を志向した1月闘争をもって対決し、敗北したがゆえに、社会民主主義を標榜するドイツ社会民主党における余剰であった。他方、正統になりおおせたロシア社会主義革命の指導者、レーニン (Vladimir Ilich Lenin, 1870—1924) との関連においては、ルクセンブルクは、特に「ロシア革命論」⁽³⁾でレーニンの諸政策に対して彼女独自の思想基盤の延長線上での批判を行い、これに対して同次元での、すなわち普遍的なものと特殊一国的なものとを混同した反批判をうけ、「まちがった体系」⁽⁴⁾の構築者として断片的な評価の上に位置づけられてきた。それは余剰としての存在であった。

しかし、思想と行動の究明は全体を要求する。すなわち、「政治生活が、社会生活の全体の集中的なあり方」なのであり、「社会生活の全体を対象とするものが——あるいは、全体を対象として志向するものが、社会思想であり」、「社会思想の中核的内

容は政治思想」⁶⁶である。

ここでは、ルクセンブルクにおける思想と行動を理解するための端緒を明らかにすることが目的である。

思想と行動を理解するためには、まずその思想の燃焼過程に焦点をあてなければならないであろう。

社会的実践を通じてルクセンブルクの思想に脈うっているものは、社会民主党内で具体的な力となってその首座をしめてゆく修正主義に対する闘争の思想である。

これがひいては大衆の自然発生性のエネルギーを過大に評価する思想と表裏一体をなすものであり、ルクセンブルクの思想の核を形成しているものである。しかもルクセンブルクは、思想闘争をあくまで社会民主党内にとどまて行うべきものとしており、党を去ることは逃避であり大衆に対する裏切りでさえあるとし、党内にとどまてこそ修正派指導部に決定的な打撃を与えうると主張した。その立場は急進的であった。

急進的であるルクセンブルクを評価するのは、ただ急進的であることをもってのみ評価するのではない。社会民主党内において修正派に対し急進的であることをもって評価するのである。

19世紀末葉から20世紀初頭にかけて世界資本主義が、いわゆる「帝国主義の時代」にさしかかった歴史状況の中でドイツ帝国の最大の課題は、帝国主義政策の遂行にあり、そのための国内政策は対社会民主党問題を中心としていた⁶⁷。

第1次ロシア革命（1905年）の息吹をワルシャワで吸い込んだルクセンブルクは、大衆ストライキさらにはゼネラルストライキ闘争を通じてプロレタリアートの階級意識は発展するのであり、ロシア革命にこそ学ばねばならないと主張したが、社会民主党内では、労働運動の高まりの中でむしろ修正派が着実に組織を拡大してゆく。そうした時点で急進的であったルクセンブルクの存在は何であったのか。

事態は大衆ストライキの各地での勃発をもって客観化した。これは、1891年に党綱領として採択された、「エルフルト綱領」⁶⁸に対する問題提起であったし、かつルール炭鉱ストライキをはじめ各邦での選挙法改正運動などにみられる自然発生の性格をもつ運動の激化により、社会民主党に分裂の契が打ち込まれた。

1905年9月のイエーナ党大会において、政治的大衆ストライキを変革の武器として強調する急進派と、これを拒否しようとする修正派との抗争の結果、採択された決議は、政治的大衆ストライキをあくまで議会活動及び労働組合運動の範囲内に限定して行い、党や労働組合の組織拡大に役立てるべき手段とすること、と主張した折衷的な決議⁶⁹であった。つづく1906年1月、ハンブルクでドイツ最初の政治的大衆ストライキに労働者が立ち上ったのをしりめ、同年9月のマンハイム党大会では、労働組合を党に従属させることを主張した急進派は斥けられ、運動を経済闘争の枠内に限定する「労働組合の中立性（Neutralität der Gewerkschaften）」の理論がとりあげられ、

修正派の実質的勝利を結果した。ここに、政治的大衆ストライキ問題を中心に党と労働組合との関係をめぐって、社会民主党内では、急進派・中央派・修正派への分裂が生じた。

一方、労働組合においても、その首座は「自由労働組合（Freie Gewerkschaften）」が占め、しかもそれは第1回ドイツ労働組合大会（1892年3月）において労働運動の階級闘争性を強調する急進派の地方組合を斥けて中央集権化の方向を確立していた。その結果社会民主党との間に修正派コンビナートが確立し、これを基盤に一層拡大された組織をまきこみつつ改良主義的日常闘争が組まれていった。

またもやめぐりきた夏の日のように、歴史に強烈な光を投げかけた自然発生の性格をもつ大衆のエネルギーの茫邈とした盛りあがりを目の前に、他方このエネルギーを日常改良闘争の枠内に納め込もうとする修正派をうしろに、ルクセンブルクは、何を、どのように思考し、どんな行動をとったか。すなわちルクセンブルクの思想はどのように燃焼していったか。

ここにルクセンブルクの思想と行動を理解するための端緒をおく。

注（1） 1914年、第1次世界大戦を防衛戦争と規定し、戦争予算案に同意した社会民主党の主流派、「社会愛国主義者」に反対して、反軍国主義、平和主義を唱える「社会平和主義者」、および戦争を内乱へ誘導しようとした「社会革命主義者」は、次第に党の主流との対立を深め、両者は遂に1917年4月に党から分離して、「独立社会民主党（USPD）」を結成した。一方、1916年1月に結成された非合法の「スパルタクス団」は、社会民主党の分裂後は、「独立社会民主党」の左派として活動を共にしたが、1919年1月、「ドイツ共産党（KPD）」の創設にふみきった。

（2） 篠原 一『ドイツ革命史序説——革命におけるエリートと大衆——』岩波書店、1956年、57ページ。

（3） 西川正雄「ローザ・ルクセンブルクとドイツの政治」史学雑誌、69編第2号（1960）同「ローザ・ルクセンブルク解釈の流れ」歴史学研究、239号、に『ロシア革命論』の分析、及び『ロシア革命論』におけるポリシェヴィキ批判をめぐっての諸問題点についての詳細な論及がなされている。

（4） F. Oelßner: Rosa Luxemburg. Eine kritische biographische Skizze, Berlin 1952.

杉山忠平訳『ローザ・ルクセンブルク——その生涯と業績』理論社、1952年 114ページ、「重要なのは、個々の相互に孤立したあやまりではなく、個々の諸部分が相互に関連しあっているまちがった体系が問題なのである」としている。

E. Thälman: Der revolutionäre Ausweg und die K. P. D., Berlin 1932.

テールマンも「蓄積論、農民問題、民族問題、革命の諸問題に関する問題、プロレタリア独裁の問題、組織問題、党の役割、または、大衆の自然発生の性の問題などにおけるルクセンブルクの誤り、これらすべてがルクセンブルクをしてレーニンの

な完全な明確さに到達させなかったあやまりの体系を作り出しているのである」
として、これを「ローザ・ルクセンブルクのあやまりの体系」としている。

(5) 出口勇蔵「社会思想一論」経済論叢, 97巻第1号, 1966年

(6) 大野英二『ドイツ資本主義論』未来社, 1965年, 序論 危機の社会的基盤, 参照。

村瀬興雄『ドイツ現代史』東京大学出版会, 1954年, 第4章 第1次大戦前の内政問題, 参照。

(7) K. カウツキーの起草によるこの綱領は2つの部分よりなる。ひとつは社会民主党の原則と目的とに関する一般的理論部分で、他は社会民主党が、実践の党として、現在の社会及び国家に対する要求を包含する実践部分とからなり、さらに理論部分は、3段に分かれる。第1は現代社会の特徴とその発達, 第2は社会民主党の目的, 第3はその目的実現のための手段である。三輪寿壮訳, カウツキー『社会民主党綱領解説——エルフルト綱領——』弘文堂, 大正14年。

浅井啓吾「ドイツ社会民主党史研究序説 上」経済系, 57集 参照。

(8) ベーベル (August Bebel, 1840—1913) ら党幹部によるこの決議案は、中央派のよって立つ基盤を示すものであった。

いわゆるマルクス主義「中央派」が、明瞭な形で出現したのは、1910年9月のマゲデブルク党大会であった。

村瀬興雄『ドイツ現代史』179ページ。

II ローザ・ルクセンブルクの著作

単行書

1. Die industrielle Entwicklung Polens. Leipzig 1898.
チューリッヒ大学に提出された学位論文。
2. Sozialreform oder Revolution? Mit einem Anhang: Miliz und Militarismus. Leipzig 1899.
ベルンシュタインの「社会主義の諸問題」, 「社会主義の諸前提と社会民主党の任務」に対する批判の書。
3. Massenstreik, Partei und Gewerkschaften. Hamburg 1906.
4. Die Akkumulation des Kapitals. — Ein Beitrag zur ökonomischen Erklärung des Imperialismus. Berlin 1913.
5. Militarismus, Krieg und Arbeiterklasse. Verteidigungsrede vor der Frankfurter Strafkammer am 20. Februar 1914. Frankfurt 1914.
Dasselbe. Mit einer Einleitung von Paul Frölich. Berlin 1923.
6. Junius: Die krise der Sozialdemokratie. Anhang: Leitsätze über die Aufgaben der internationalen Sozialdemokratie, Zürich 1916.

7. [翻訳] Wladimir Korolenko: Die Geschichte meines Zeitgenossen. Aus dem russischen übersetzt und mit einer Einleitung versehen von Rosa Luxemburg. 2 Bde. Berlin 1919—20.
8. Die Akkumulation des Kapitals oder was die Epigonen aus der Marxschen Theorie gemacht haben. Eine Antikritik. Leipzig 1921, Berlin 1922.
9. Die russische Revolution. Eine kritische Würdigung. Aus dem Nachlass herausgegeben und eingeleitet von Paul Levi. Berlin 1922年.
Dasselbe. Erste vollständige Ausgabe, herausgegeben von, Neuer Weg ' Paris 1939.
Dasselbe. Vollständige Ausgabe. Herausgegeben und eingeleitet von Peter Blachstein. Hamburg 1948.
10. Einführung in die Nationalökonomie. Herausgegeben von Paul Levi. Berlin 1925.

著作集

1. Gesammelte Werke. Herausgegeben von Clara Zetkin, und Adolf Warski, Eingeleitet und Bearbeitet von Paul Frölich.
Band VI Die Akkumulation des Kapitals, Berlin 1923.
" III Gegen den Reformismus, Berlin 1925.
" IV Gewerkschaftskampf und Massenstreik, Berlin 1928. 以上3巻のみ出版されたが、計画では、全9巻にわたって出版される予定であった。すなわち、
Band I Polen
Band II Die russische Revolution
" III Gegen den Reformismus
" IV Gewerkschaftskampf und Massenstreik
" V Der Imperialismus
" VI Die Akkumulation des Kapitals
" VII Krieg und Revolution
" VIII Nationalökonomie
" IX Briefe, Gedenkartikel, historische Aufsätze 以上9巻である。
2. Paul Frölich: Redner der Revolution, Vol. IX: Rosa Luxemburg. Berlin 1928.
3. Ausgewählte Reden und Schriften. Berlin 1951. Band I, II. 1巻には、ルクセンブルクに関するレーニン及びスターリンの論文が収録してある。
4. Ich war, ich bin, ich werde sein. Berlin 1958. 1918年11月—1919年1月の間、
'Rote Fahne' にのった論文から選択したものを収録。
5. Rosa Luxemburg im Kampf gegen den deutschen Militarismus. Berlin 1960.
6. Die Russische Revolution. Frankfurt 1963. Ossip K. Flechtheim 編集及び訳

介による最新版。ポーランドでの出版。

7. Wybór pism Warsaw, 1959. Bronisław Krauze 編, 主にポーランドの論文収録。ソヴィエトでの出版。
8. Roza Lyuksemburg o literature. Moscow 1961. M. Korallowa 編及び紹介, 主に文学に関するものを収録。英国での出版。
9. Leninism or Marxism ? The Russian Revolution. Ann Arbor (Michigan), 1961. Bertram D. Wolfe 編。

評 伝

1. Kautsky, Luise: Rosa Luxemburg, Ein Gedenkbuch. Berlin 1929.
 2. Roland-Holst, Henriette: Rosa Luxemburg, ihr Leben und Wirken. Zürich 1937.
 3. Frölich, Paul: Rosa Luxemburg Gedenke und Tat. Paris 1939年; Hamburg 1949.
 4. Fouchere, Berthe: La vie heroïque de Rosa Luxemburg. Paris 1946.
 5. Döblin, Alfred: Karl und Rosa, Eine Geschichte zwischen Himmel und Hölle. Munich 1950年.
 6. Oelssner, Fred: Rosa Luxemburg, Eine kritische biographische Skizze. Berlin 1951.
- 杉山忠平訳『ローザ・ルクセンブルク——その生涯と業績——』理論社, 1955.
7. Cliff, Tony: Rosa Luxemburg. London 1959.
- 浜田泰三訳『ローザ・ルクセンブルグ』現代新書12, 現代思潮社, 1961.
8. Hochdorf, Max: Rosa Luxemburg. Berlin.

III 日本における関連論文

a. ローザ・ルクセンブルク

- 1 久留間敏造「古典派, 俗流, 歴史派及マルクス派経済学 (ローザ・ルクセンブルグ)」大原社会問題研究所雑誌, 1巻1号, 大正12年.
- 2 久留間敏造「資本主義社会に於ける再生産の問題 (ルクセンブルグ)」大原社会問題研究所パンフレット, 12号, 大正12年.
- 3 井口孝親「独逸革命の犠牲者, ローザ・ルクセンブルグ」我等 同人社書店, 5巻6, 7号, 大正12年.
- 4 堺 利彦「資本論第二巻及び第三巻 (ルクセンブルグ)」マルクス主義, 希望閣 1巻1号, 大正13年.
- 5 ルクセンブルグ「社会主義と議会主義」社会思想, 3巻6号, 大正13年.
- 6 櫛田民蔵「ローザ・ルクセンブルグの思い出」我等, 7巻10号, 大正14年.
- 7 石浜知行「カールとローザの夕 (放浪記)」社会思想, 4巻3号, 大正14年.

- 8 井口孝親訳『ローザ・ルクセンブルグの手紙』同人社, 大正14年, (吉野作造の序あり). (Briefe aus Gefängnis, Berlin 1920の訳)
 - 9 河上 肇「労働の生産力の発展と資本蓄積との衝突 (ローザ・ルクセンブルグの「資本の蓄積」について)」社会問題研究, 69号, 大正15年.
 - 10 千葉雄次郎「二人の革命家 (ドイツ革命夜話)」社会思想, 5巻7号, 大正15年.
 - 11 佐野文夫訳, ルクセンブルグ著『経済学入門』叢文閣, 昭和1年.
 - 12 横田千元訳, ルクセンブルグ著『資本蓄積論 (第一冊)』白楊社, 昭和1年.
 - 13 横田千元訳, ルクセンブルグ著『資本蓄積論 (第二冊)』白楊社, 昭和1年.
 - 14 宗 道太訳, ルクセンブルグ著『資本蓄積再論—亜流は marx 説から何を作り出したか』同人社, 昭和1年.
 - 15 河上 肇「資本蓄積の行き詰り (前冊 (No. 9) の補遺)」社会問題研究, 70号 昭和1年.
 - 16 益田豊彦・高山洋吉訳, ルクセンブルグ著『資本蓄積論』同人社, 昭和2年.
 - 17 エス・デウオイラッキー「ローザ・ルクセンブルグ資本蓄積論の批評」社会科学, 3巻2号, 昭和2年.
 - 18 高村浪夫訳『ローザ・ルクセンブルグ』弘文堂, 昭和2年.
 - 19 松本悟朗訳, ルクセンブルグ著『大衆罷業, 党及組合』白楊社, 昭和2年.
 - 20 松山止才訳, ルクセンブルグ著『ローザ政治論集』叢文閣, 昭和2年.
 - 21 鳥海篤助訳「デウオイラッキー『ローザ・ルクセンブルグ資本蓄積論の批評』」社会科学, 3巻2号, 昭和2年.
 - 22 佐多忠隆「資本主義崩壊過程の理論的研究——ローザ・ルクセンブルグ著『資本蓄積論』を読む」帝国大学新聞, 昭和2年1月30日.
 - 23 清水平九郎訳『マッセンストライク』弘文堂, 昭和3年.
 - 24 ルクセンブルグ「経済学史とマルクスの立場」社会科学, 5巻2号, 昭和4年.
 - 25 正富汪洋「ローザ・ルクセンブルグ嬢を懷ふ」現代日本文学全集37, 現代日本詩集, 改造社, 昭和4年.
 - 26 生田春月「ローザ・ルクセンブルグ」現代日本文学全集37, 現代日本詩集, 改造社, 昭和4年.
 - 27 落合敏也「ローザ『資本蓄積論』」経済往来 6巻12号, 昭和6年.
 - 28 草ヶ江二郎訳, リュシアン・ローラ著『資本蓄積論入門 (Accumulation du Capital d'après Roosa Luxemburg)』共生閣, 昭和7年.
 - 29 松井圭子訳『ローザ・ルクセンブルグの手紙』岩波文庫, 昭和8年. (Briefe an Karl und Luise Kautsky hrsg. L. Kautsky, Berlin 1923の訳)
 - 30 相原 茂「資本蓄積論争」経済評論, 1—7号, 昭和21年.
 - 31 松井圭子「ローザ・ルクセンブルグ—女流革命家の生涯」思索, 昭和23年.
- 145 (008)

- 32 坂本徳松『ローザ・ルクセンブルグ』黄土社, 昭和24年.
- 33 野々村一雄「ローザ・ルクセンブルグ」『社会科学講座VI』弘文堂, 昭和25年.
- 34 猪木正道『ドイツ共産党史—西欧共産主義の運命』弘文堂, 昭和25年.
- 35 松井 清『国民経済と世界経済—民族理論との関係において—』(Ⅱ)「ローザにおける国民経済と世界経済」アテネ新書 No. 18, 弘文堂, 昭和25年5月.
- 36 北郷隆五郎訳『ローザ・ルクセンブルグの手紙』青木文庫 (大内兵衛の解説を含む), 昭和27年.
- 37 秋元寿恵夫訳『獄中からの手紙 (ローザ・ルクセンブルグ)』世界文学社, 昭和27年.
- 38 太陽寺順一「ローザ・ルクセンブルグ解釈の動向」(学界展望) 経済評論 4月号, 昭和29年.
- 39 三浦純雄「戦争と内乱—第1次世界大戦とローザ・ルクセンブルグ」民科編『世界歴史講座 5』, 三一書房, 昭和29年.
- 40 大内兵衛「ローザ・ルクセンブルグの手紙」婦人公論, 昭和30年.
- 41 杉山忠平訳, エルスナー著『ローザ・ルクセンブルグ—その生涯と業績—』理論社, 昭和30年3月.
- 42 関・河上訳, フック著『マルクスとマルクス主義者たち』第7章 レーニンとルクセンブルグ, 社会思想研究会出版部, 昭和31年.
- 43 相原 茂「ローザ・ルクセンブルグ」相原 茂編『経済学説全集 8巻』河出書房, 昭和31年.
- 44 堀 新一「恐慌学説批判(4)—ローザの再生産論—」名城商学, 5巻3, 4号, 昭和31年3月.
- 45 吉村 励「ローザ・ルクセンブルグ」大河内一男等編『社会主義講座 3 3, 4 革命と行動の社会主義』河出書房, 昭和31年6月所収.
- 46 平井 潔・古沢友吉『解放史上の三女性——マルクス夫人, ローザ・ルクセンブルグ, レーニン夫人』東洋経済新報社, 昭和31年10月.
- 47 清水嘉治「S. デュヴォイラッキーの『市場理論』について—ローザ「帝国主義論」批判の再検討のために—」経済系, 35号, 昭和32年7月.
- 48 吉村正晴「ローザ『拡張再生産表式の矛盾』に関する研究—貿易問題への再生産論の適用方法の一吟味 (前篇)—」産業労働研究所報別冊, 昭和33年3月.
- 49 吉村正晴「同名論文 (後篇)」森教授還暦祝賀論文集, 経済学研究, 23巻 3, 4 合併号, 九州大学経済学会, 昭和34年4月.
- 50 能谷一男「ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』(古典案内), 経済セミナー, 24号, 昭和33年11月.
- 51 海道勝稔「ローザ・ルクセンブルグをめぐる拡大再生産—表式についての論争

- 一」 富大経済紀要, 14号, 昭和34年3月.
- 52 古在由重訳 (Sweezy, Paul. M) 「経済学者および革命家としてのローザ・ルクセンブルグ」 (イタリア版『資本蓄積論』のための序文) 思想 4巻19号, 昭和34年5月.
- 53 池上 惇「ローザ・ルクセンブルクの資本蓄積論と貨幣蓄蔵の理論」 経済論叢 (京大) 84巻5号, 昭和34年11月.
- 54 西川正雄「20世紀のカサンドラ」 歴史教育, 7巻2, 3号.
- 55 西川正雄「ローザ・ルクセンブルクとドイツの政治」 史学雑誌 69巻2号, 昭和35年2月.
- 56 西川正雄「ローザ・ルクセンブルク解釈の流れ」 歴史研究 239号, 昭和35年3月.
- 57 海道勝稔「拡大再生産表式における資本主義の内在的矛盾と恐慌—ローザ・ルクセンブルク再生産論論争—」 富大経済論集 5巻4号, 昭和35年3月.
- 58 海道勝稔「拡大再生産表式と帝国主義の『経済的基礎』—ローザ・ルクセンブルク再生産論論争の考察—」 富大経済論集, 6巻2号, 昭和35年10月.
- 59 高山 満「ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』における一問題—〈ローザ覚書〉—」 東京経済大学60周年記念論文集, (『東京経大会誌』29・30合併号, 「貿易研究」特集号), 東京同大学, 昭和35年12月.
- 60 関 恒義「ローザ・ルクセンブルク」—橋論叢, 45巻4号, 昭和36年4月.
- 61 伊藤成彦「誤ちににつけてむということ, 最近のローザ・ルクセンブルクの評価」 図書新聞, 607号, 昭和36年6月10日.
- 62 浜田泰三訳, クリフ (Clif, Tony) 著『ローザ・ルクセンブルク』 (現代新書) 現代思潮社, 昭和36年9月.
- 63 高原宏平・野村 修・田窪清秀・片岡啓治訳『ローザ・ルクセンブルク選集2』 1905—1911, 『同3』, 1911—1916, 現代思潮社, 昭和37年.
- 64 田窪清秀・高原宏平・野村 修・救仁郷繁・清水幾太郎訳『ローザ・ルクセンブルク選集4』 1916—1919, 現代思潮社, 昭和37年12月.
- 65 松田秀人「スパルタクス派のプロレタリア党組織論—ローザ・ルクセンブルクの理論を中心として—」 政治研究, 10, 11号, 昭和38年3月.
- 66 有田 稔「マルクス理論とローザ理論の間」 経済論集 (関大), 13巻1, 2号, 昭和38年6月.
- 67 西村達夫「実現の論理とローザ・ルクセンブルク」 東北学院論集, 43号, 昭和38年6月.
- 68 野村 修・田窪清秀・高原宏平・喜安 朗・片岡啓治訳『ローザ・ルクセンブルク選集1』 1893—1904, 現代思潮社, 昭和38年6月.
- 69 松岡 保「ローザ・ルクセンブルク」『20世紀を動かした人々—反逆者の肖像13』 講談社, 昭和38年.

- 70 川口 浩・松井圭子訳、カウツキー編『ローザ・ルクセンブルクの手紙—カール
およびリィゼ・カウツキー宛 (1896—1918)』岩波書店、昭和38年10月。
- 71 静田 均「資本蓄積と拡大再生産表式—ローザ・ルクセンブルクに関する断章
—」オイコノミカ、1巻 1, 2号, 昭和39年4月。
- 72 伊藤成彦「ローザ・ルクセンブルクの人と思想」思想, 480号, 昭和39年6月。
- 73 海道勝稔「ローザ・ルクセンブルク拡大再生産表式の基本的性格」土地制度史学,
25号, 昭和39年10月。
- 74 平井俊彦「ルカーチの『ローザ・ルクセンブルク論』」甲南経済学, 62号, 昭和
40年3月。
- 75 平井俊彦訳, ルカーチ (Lukács, G.) 著『ローザとマルクス主義』(歴史と階級意
識) ミネルヴァ書房, 昭和40年5月。
- 76 松田秀人「東独におけるスバルタクス派評価の方法—「ドイツ労働運動史綱要」
の方法を手がかりとして—」法政研究 31巻 5, 6号, 昭和40年8月。
- 77 柴田高好「『平和と革命』論の歴史的系譜—ローザとグラムシ」思想 494号, 昭和
40年8月。
- 78 池上 惇「資本主義経済の『適応能力』理論の発生過程—ベルンシュタインとロ
ーザの論争によせて—」経済論叢 (京大), 96巻 4号, 昭和40年10月。
- 79 松井圭子「嵐の中の不屈の生涯 (ルクセンブルク)」潮, 11月号, 昭和40年。
- 80 静田 均「拡大再生産表式の問題点—ローザ・ルクセンブルクに関する覚書—」
オイコノミカ, 第2巻 1, 2号, 昭和41年1月。
- 81 衣笠哲生「ロシア社会民主党の組織問題をめぐるレーニンとローザ・ルクセンブ
ルク」社会科学論集 (九大), 6号 昭和41年2月。
- 82 竹本信弘「ポーランド社会主義運動とその思想」経済論叢 (京大), 98巻 1号,
昭和41年7月。

b ドイツ社会民主党

社会民主党

- 1 高野省三郎「戦時に於ける独逸の社会民主党及び職工組合」国家学会雑誌, 29巻
10, 11号, 大正4年。
- 2 桑田熊蔵「独逸社会党に於ける硬軟両派の衝突」(金井教授在職25年記念最近社
会政策) 有斐閣, 大正5年。
- 3 森戸辰男「戦争と独逸社会民主党」法学志林, 18巻 6号, 大正5年。
- 4 森戸辰男「独逸社会党に於ける社会改良思想」国家学会雑誌, 30巻 9号, 大正5
年。
- 5 樺田民蔵「独逸社会民主党員の軟化論」国家学会雑誌, 31巻 6号, 大正6年。
- 6 樹下石上人「大戦渦中の独逸社会民主党」東方時論, 2巻10号, 大正6年。
- 7 山口義一「戦時独逸に於ける社会民主党」法政論叢, 9号, 大正7年。

- 8 田辺忠男訳, (米) エドウキン・ビーヴァン著『晩近独逸社会民主党運動史』国文堂, 大正9年.
- 9 外交時報社編『社会民主党』通俗国際文庫, 国文堂, 大正9年.
- 10 大原武夫「独逸諸政党的政綱」大阪毎日新聞, 8月19—22日, 大正9年.
- 11 堀切善次郎「独逸社会民主党政綱改正案」社会政策時報, 15号, 大正10年.
- 12 蠟山政道「独逸民主党ゲーリッツ綱領」国家学会雑誌, 35巻12号, 大正10年.
- 13 名倉聞一「新独逸の政党政派」表現, 2巻10号, 大正11年.
- 14 高野岩三郎「独逸社会民主党新綱領解説」大原社会問題研究所パンフレット, 2号, 大正11年.
- 15 波多野 鼎「新装の独逸社会民主党」表現, 2巻10号, 大正11年.
- 16 井口孝親「独逸社会民主党の新綱領」我等 4巻2号, 大正11年.
- 17 井口孝親「独逸多数独立両社会党合同問題の回顧と予測」我等, 4巻6号, 大正11年.
- 18 井口孝親「独逸両社会党合同完成の前史」我等5巻2, 3号, 大正12年.
- 19 森戸辰男「ドイツ社会党合同問題と其背景」大原社会問題研究所雑誌, 1巻1号, 大正12年.
- 20 永井 享「独逸社会民主党の産業及社会政策」社会政策時報, 34号, 大正12年.
- 21 カール・ディール「最近の独逸社会民主党の変遷」改造, 5巻9号, 大正12年.
- 22 森戸辰男「ドイツ両社会党合同前史」大原社会問題研究所雑誌, 2巻1号, 大正13年.
- 23 森戸辰男「ドイツ両社会党合同の経緯」大原社会問題研究所雑誌, 2巻2号, 大正13年.
- 24 森戸辰男「ドイツ社会党合同の完成」大原社会問題研究所雑誌, 3巻1号, 大正14年.
- 25 森戸辰男「最近ドイツ社会党史の一齣」同人社書店, 大正14年.
- 26 稲垣守克「独逸連立内閣と政党関係」法律及政治, 4巻2号, 大正14年.
- 27 稲垣守克「独立社会民主党の外交政策」法律及政治, 4巻1号, 大正14年.
- 28 池田林蔵「独逸政治と枢軸としての中央党」外交時報, 482号, 大正14年.
- 29 村上 保「独逸社会民主党の歴史的背景」マルクス主義, 3巻4号, 大正14年.
- 30 堀 真琴「アウグスト・ベーベルと社会民主党前史」我等, 7巻7号, 大正14年.
- 31 岩城忠一「独逸社会党内の諸分派」商学論叢, 1巻3号, 大正15年.
- 32 森戸辰男「戦争と独逸社会民主党」法学志林, 18巻6号, 大正15年.
- 33 赤松克麿「社会民主党の回顧—我国社会思想研究の二」中央公論, 41巻12号, 昭和1年.
- 34 河西太一郎「農業問題に於ける社会民主党と共産党」社会科学, 3巻1号, 昭和141 (012)

- 2年.
- 35 河田嗣郎「独逸社会民主党の農政綱領」経済論叢, 25巻3号, 昭和2年.
 - 36 井口孝親「独立社会党分裂の経緯とその意義 (1—4)」我等, 11巻4—7号, 大正3年.
 - 37 栗原藤七郎「独逸社会民主党と農業問題」社会政策時報, 93号, 昭和3年.
 - 38 井口孝親「独立社会党分裂の経緯とその意義 (続)」我等, 11巻5号, 昭和4年.
 - 39 井口孝親「独立社会党分裂の経緯とその意義 (続)」我等, 11巻6号, 昭和4年.
 - 40 大内兵衛「ドイツ社会民主党の租税に関するテーゼ」大原社会問題研究所雑誌, 7巻1号, 昭和5年.
 - 41 米田幸雄訳, メーリング, F. 著
 『独逸社会民主党史(一)』世界大思想全集17, 春秋社, 昭和6年.
 『独逸社会民主党史(二)』世界大思想全集18, 春秋社, 昭和8年.
 『独逸社会民主党史(三)』世界大思想全集19, 春秋社, 昭和7年.
 『独逸社会民主党史(四)』世界大思想全集20, 春秋社, 昭和6年.
 - 41 河合栄治郎「独逸社会民主党とマルキシズムの修正」経済学論集, 4巻6号, 昭和9年.
 - 42 大内兵衛「ドイツ社会民主党の農政綱領について」大原社会問題研究所雑誌, 3巻1号, 昭和11年.
 - 43 木下悦二「ドイツ社会民主党の関税論争 (研究)」経済学雑誌, 45巻2号, 昭和12年.
 - 44 上田作之助「ドイツ共産党とその政策」新社会, 1巻2号, 昭和21年.
 - 45 上田作之助「独逸社会民主党の没落の跡を辿る」世界経済 1巻6号, 昭和21年.
 - 46 上田作之助「ドイツ諸政党の分析」世界週報, 28巻9号, 昭和22年.
 - 47 鈴木東民「社会党とドイツ社会民主党」人民戦線, 3巻14号, 昭和22年.
 - 48 河合栄治郎「独逸社会民主党史研究」日本評論社, 昭和23年.
 - 49 向坂逸郎「ある時代のドイツ社会民主党」世界週報, 31巻1号, 昭和25年.
 - 50 吉村 励「二つのドイツ社会民主党史」(はしがき, 1. 河合栄治郎「ドイツ社会民主党史論」2. 猪木正道「ドイツ共産党史」むすび) 昭和25年.
 - 51 三沢潤生「ドイツ社会民主党組織規則」レファレンス, 79号, 昭和32年.
 - 52 西尾孝明「ドイツ社会民主党に於ける組織論の陥穽」政経論叢 (明大), 27巻5号, 昭和33年.
 - 53 広田司朗「ドイツ社会民主党の財政政策(2)」商学論集 (関大), 4巻2号, 昭和34年.
 - 54 和田耕作「ドイツ社民党綱領とイギリス労働党大会の問題点」フェビアン研究,

11巻2号, 昭和35年.

55 関 嘉彦「ヨーロッパの社会主義運動の発展—ドイツ社会民主党を中心として—」日労協雑誌, 11号, 昭和35年2月.

56 広田司朗「ドイツ社会民主党の財政政策(3)」商学論集 (関大), 4巻7, 8号, 昭和35年3月.

57 広田司朗「ドイツ社会民主党の財政政策(4)」商学論集 (関大), 5巻2号, 昭和35年6月.

58 広田司朗「ドイツ社会民主党の財政政策(5)」商学論集 (関大), 5巻4号, 昭和35年10月.

59 飯田 鼎「第1次世界大戦勃発とドイツ社会民主党—ドイツ社会運動史にかんする最近の資料 (4の1)—」三田学会雑誌, 54巻1号, 昭和36年1月.

60 広田司朗「ドイツ社会民主党の財政政策 (6—7)」商学論集 (関大), 5巻6, 7号, 6巻1号, 昭和36年.

61 飯田 鼎「第1次世界大戦中におけるドイツ社会民主党とプロレタリア国際主義—ドイツ社会運動史にかんする最近の資料 (4の2)—」三田学会雑誌, 54巻10号, 昭和36年10月.

62 木下悦二「ドイツ社会民主党の関税論争」経済学雑誌, 45巻2号, 昭和36年8月.

63 広田司朗『ドイツ社会民主党と財政政策』有斐閣, 昭和37年5月.

64 山崎 怜・広田司朗著「ドイツ社会民主党と財政政策」経済論叢 (香川大), 35巻4号, 昭和37年10月.

65 中山禪雄「ドイツ関税政策と社会民主党」経済学研究 (九大), 28巻5号, 昭和37年.

66 西尾孝明「ドイツ社会民主党の組織問題—その保守化のメカニズム—」政経論叢 (明大), 31巻3号, 昭和38年1月.

67 吉村 正「ドイツ社会民主党の組織」早稲田政経雑誌, 179号, 昭和38年2月.

68 浅井啓吾「ドイツ社会民主党史研究序説(上)—世紀転換期における正統主義と修正主義をめぐって」経済系, 57集, 昭和38年7月.

69 浅井啓吾「ドイツ社会民主党研究序説(下)—世紀転換期における正統主義と修正主義をめぐって—」経済系, 59・60集, 昭和39年3月.

70 浅井啓吾「ドイツ社会民主党の国家論」経済系, 62集, 昭和39年10月.

71 上杉重二郎「1946年4月, 東部ドイツにおけるドイツ共産党とドイツ社会民主党との合同について」立教経済学, 18巻4号, 昭和40年2月.

72 山口和男「ドイツ社会民主党の農業論争—19世紀ドイツ社会主義の思想的性格検出のための一論—」思想, 490号, 昭和40年4月.

73 西尾孝明「ドイツ社会民主党の党大会—その保守化のメカニズム—」政経論叢

(明大), 33巻 3, 4, 5, 6号, 昭和40年5月.

- 74 山口和男「ドイツ社会民主党急進派の革命思想—パルヴスの場合—」思想, 497号, 昭和40年11月.
- 75 五十嵐豊作「ドイツにおける党と国家の関係」法律時報, 12巻9号.
- 76 竹内徳治「エアフルト綱領改正案に対するキューノーの批評」国家学会雑誌, 35巻12号, 大正10年.
- 77 大山千代雄「メーリング『哲学の窮乏』に現われたる唯物史観(訳)」我等, 4巻5号, 大正11年.
- 78 福田徳三「リープクネヒト獄中遺稿 マルクス価値論批評」改造, 5巻3—6号, 大正12年.
- 79 水野正次訳, レーニン, ツェトキン著『婦人に与ふ』(婦人問題叢書第1篇) 共生閣, 昭和2年.
- 80 チェトキン「有識者問題」社会科学, 4巻4号, 昭和3年.
- 81 河西太一郎訳, W・リープクネヒト著『土地問題論』改造社, 昭和3年.
- 82 岡田宗司訳, メーリング著『唯物史観』叢文閣, 昭和4年.
- 83 松原セツ「クララ・ツェトキン研究序説—その生涯とプロレタリア婦人運動—」北大経済学, 5号, 昭和37年.
- 84 五十嵐 顕訳, ツェトキン (Zetkin, C.) 著『民主教育論—労働者階級と教育—』東京・明治図書, 昭和37年10月.
- 85 松原セツ「クララ・ツェトキン研究序説(2)—クララ・ツェトキンはドイツプロレタリア婦人運動史をいかに論評したか—」北大経済学, 6号, 昭和37年11月.
- 86 篠筈恵爾「『ビューロウ・ブロック』の解体とドイツ社会民主党」商学論集(福島大学), 32巻3号, 昭和38年.

K. カウツキー

- 1 樺田民蔵「カウツキー『文化史上のマルクス』(訳)」我等, 1巻14号, 大正8年. 2巻1—6号, 大正9年.
- 2 河上 肇「カウツキー『社会主義と各種階級の人々』(訳)」社会問題研究, 11号, 大正8年. 13号, 大正9年.
- 3 樺田民蔵「カウツキー『恐慌と資本家経済』」我等, 2巻8号, 大正9年.
- 4 高島素之訳, カール・カウツキー著『マルクス資本論解説』大鑑閣, 大正10年.
- 5 来原慶助訳(補), カール・カウツキー原著『民主政治と独裁政治』広文館, 大正10年.
- 6 室伏高信「カウツキーとベルンシュタイン」改造, 3巻13号, 大正10年.
- 7 カール・カウツキー「社会主義とデモクラシー」解放, 4巻2号, 大正11年.
- 8 カウツキー「ビスマルクの見たるギルヘルム二世」改造, 4巻3号, 大正11年.
- 9 高島素之訳, カウツキー著「社会主義とデモクラシー」解放, 4巻2号, 大正11

年.

- 10 高畠素之訳, カウツキー著「階級独裁と政党独裁」解放, 4巻3号, 大正11年.
- 11 高畠素之訳, カウツキー著「労働者とは誰か? (普通選挙と労働者選挙)」解放, 4巻6号, 大正11年.
- 12 三輪寿壮訳, カウツキー著『社会民主党綱領エルフルト綱領』大鑑閣, 大正12年.
- 13 小島幸治「カウツキーの『修道院的共産主義』を読む」三田学会雑誌, 17巻8号, 大正12年.
- 14 カウツキー「社会主義と植民政策」大原社会問題研究所雑誌, 2巻1号, 大正13年.
- 15 カウツキー「マルクスの経済学説を克服する唯一の方法」大原社会問題研究所雑誌, 2巻2号, 大正13年.
- 16 石川準十郎訳, カウツキー著『マルクス経済学入門』（社会哲学新学説大系第9編）新潮社, 大正14年.
- 17 三輪寿壮訳, カール・カウツキー著『社会民主党綱領解説(エルフルト綱要)』社会思想叢書第三編, 而立社, 大正14年.
- 18 三輪寿壮訳, カール・カウツキー著『社会民主党綱領解説』弘文堂, 大正14年.
- 19 カウツキー「75回の誕辰を迎ふるベルンシタイン」社会政策時報, 56号, 大正14年.
- 20 河西太一郎訳, カウツキー著「社会主義と農業小経営」社会思想, 4巻12号, 大正14年.
- 21 カウツキー「マルクスの国家観」社会科学, 2巻6号, 大正15年.
- 22 赤松五百麿訳, カウツキー著「マルクス資本論第二巻略解」我等, 8巻3, 4号, 大正15年.
- 23 大内兵衛訳, カウツキー著「フリードリッヒ・エンゲルス」我等, 8巻8—5号, 大正15年.
- 24 高橋正男訳, カール・カウツキー著『無産階級革命とその綱領』金星堂, 昭和2年.
- 25 松下芳男訳, カール・カウツキー著『マルキシズムの人口論』マルクス思想叢書5, 新潮社, 昭和2年.
- 26 河西太一郎「カウツキー『マルクス主義的農業問題研究方法』（訳）」社会科学, 3巻1号 昭和2年.
- 27 松本信夫訳, カール・カウツキー著『社会革命論』白楊社, 昭和3年.
- 28 カウツキー「インテリゲンチヤ論」社会科学, 4巻4号, 昭和3年.
- 29 阿部 勇訳, カウツキー著『『唯物史観』の一節』法政大学論集, 4巻3号, 昭和4年.
- 30 高畠素之訳, カウツキー著『資本論解説』改造社, 昭和5年.

- 31 安孫子理兵衛訳, カール・レンナア著「カウツキーと独逸社会民主党」日本読書協会会報, 115号, 昭和5年.
- 32 矢内原忠雄「超帝国主義論に就て」経済学論集, 8巻4号 昭和5年.
- 33 小池四郎訳, カウツキー著『5ヶ年計画立往生—サウイエート・ロシアの革命的実験は成功したか』昭和6年.
- 34 カール・カウツキー「産業5年計画は失敗する」公民講座, 81号, 昭和6年.
- 35 小泉信三「カウツキー著『ボルシェヴィズムの行詰り』(評論)」社会政策時報, 131号, 昭和6年.
- 36 納 武津訳, カウツキー著「ボルシェヴィズムの破綻」日本読書協会会報, 130号, 昭和6年.
- 37 林 癸未夫「カウツキーの『行詰ったボルシェヴィズム』を読む」早稲田政治経済学雑誌, 23号, 昭和6年.
- 38 由利英一訳, カウツキー著『倫理と唯物史観』共生閣, 昭和7年.
- 39 佐多忠隆訳, カール・カウツキー著『唯物史観 (第二書人間性)』日本評論社, 昭和8年.
- 40 内藤赳夫「カール・カウツキー文献 (一)」大原社会問題研究所雑誌, 10巻3号, 昭和8年.
- 41 カウツキー「恐慌と資本家経済」我等, 2巻8号, 昭和9年.
- 42 向坂逸郎, 岡崎次郎共訳, カール・カウツキー著『貨幣論』改造社, 昭和9年.
- 43 波多野 真訳, カール・カウツキー著『帝国主義論』創元文庫社, 昭和28年.
- 44 山崎春成, 崎山耕作訳, カウツキー著『農業問題(1)』国民文庫社, 昭和30年7月.
- 45 山崎義三郎「土地制度改革論と社会主義—フリユール・シャイムとカウツキーとの論争—」神戸大学経済学研究, 1号, 昭和30年10月.
- 46 静田 均「カウツキー帝国主義論の原型」経済論叢 (京大), 75巻3号, 昭和30年.
- 47 静田 均「カウツキーの帝国主義概念」経済論叢, 75巻5号, 昭和30年.
- 48 玉野井芳郎「カール・カウツキー」相原 茂編『経済学説全集8』河出書房, 昭和31年, 所版.
- 49 渡辺義晴訳, カール・カウツキー『トーマス・モアとそのユートピア』東京教育書林, 昭和32年10月.
- 50 広田司朗「K. カウツキーの財政思想(1)」商学論集 (関大), 2巻3号, 昭和32年.
- 51 中村建治「カウツキーの窮乏化論について」社会主義, 71号, 昭和32年7月.
- 52 広田司朗「K. カウツキーの財政思想(2)」商学論集 (関大), 2巻6号, 昭和33年1月.

- 53 広田司朗『K. カウツキーの財政思想(8)』商学論集 (関大), 3巻1号, 昭和33年3月.
- 54 渡辺 寛『カウツキーの『農業問題』について一階級・階層分解を中心として一』経済志林, 27巻2号, 昭和34年.
- 55 静田 均『カウツキーの超帝国主義論』経済論叢 (京大), 85巻2号, 昭和35年2月.
- 56 松岡 保『カール・カウツキーと第1次ロシア革命の農業—土地問題』人文学報 (京大), 12号, 昭和35年3月.
- 57 静田 均『超帝国主義論の批判と問題点——一つの準備的考察——』経済論叢 (京大), 85巻5号, 昭和35年5月.
- 58 村瀬興雄『ヨーロッパの社会主義像—カウツキー, パウアー, 第二インターナショナル—』思想, 489号, 昭和40年.

E. ベルンシュタイン

- 1 ベルンスタイン『同盟罷工防遏の方法』日本経済新誌, 3巻1号.
- 2 ベルンシュタイン『独逸共和国の政治及社会問題を論ず』改造, 4巻1号, 大正11年.
- 3 ベルンスタイン『社会学的進化論としての社会主義』改造, 4巻2号, 大正11年.
- 4 金原賢之助『ベルンシュタインとマルクス主義』三田学会雑誌, 16巻1号, 大正11年.
- 5 小泉信三『ベルンシュタインのポリシェビズム批評』財政経済時報, 10巻5, 6号, 大正12年.
- 6 金原賢之助『労働価値説に対するベルンシュタインの一批評』三田学会雑誌, 17巻10号, 大正12年.
- 7 松下芳男『ベルンシュタインの経済形態論』日本法政新誌, 22巻9—11号, 大正14年.
- 8 榎本謙輔『ベルンシュタイン唯物史観修正論批判』社会思想, 5巻10号, 大正15年.
- 9 河合栄治郎『ベルンシュタインの『追放の時代』』経済学論集, 5巻3号, 大正15年.
- 10 石浜知行『ベルンシュタイン『経済生活の諸形態』(訳)』社会思想, 5巻11, 12号, 大正15年. 6巻2号, 昭和2年.
- 11 金原賢之助訳, エドゥアルド・ベルンシュタイン著『マルクス主義批判』岩波書店, 昭和1年.
- 12 上田 肇訳, エドニャード・ベルンシュタイン著『社会主義の過去及び現在—過去及び現在に於ける社会主義の論争問題—』(社会文庫第22冊) 日本評論社, 昭和

- 11年.
- 13 松下芳男「ベルンシュタインの経済形態論」日本法政新誌, 22巻12号, 大正14年.
 - 14 藤本幸太郎「ベルンシュタインの『戦争と景気』を読む」柳沢統計研究所報, 46号, 昭和15年12月—昭和16年1月.
 - 15 新明正道『修正派マルクス主義—ベルンシュタイン』東京・鱒書房 (社会思想新書), 昭和22年.
 - 16 広田司朗「ベルンシュタインの財政思想 (二)」山口経済学雑誌, 6巻1・2号, 昭和30年11月.
 - 17 中条 毅「修正マルクス主義と労働組合—ベルンシュタイン主義の批判的考察—」人文学 (同志社), 19号, 昭和30年7月.
 - 18 石川準一郎「修正マルクス主義論考—ベルンシュタインのマルクス主義 修正論—」早稲田政経雑誌, 148号, 昭和32年12月.
 - 19 向坂逸郎編「マルクスの批判と反批判」(マルクス・エンゲルス選集16) 新潮社, 昭和33年3月.
第4篇マルクシズムと現代資本主義
第1章「修正派」論争
1 ベルンシュタイン (Bernstein, E) 「シュトゥットガルト党大会における釈明」
 - 20 熊谷一男「ベルンシュタイン『修正主義論』の再検討」
井汲卓一・佐藤 昇・長洲一二・水田 洋編『講座現代のイデオロギー 4 現代資本主義とマルクス主義』(さんいちらいぶらり) 昭和37年10月.
- c 社会主義・労働運動**
- 1 油谷治郎七「独逸に於ける労働組合の発達」労働及産業, 68号, 大正6年.
 - 2 河上 肇「独逸の戦時社会主義」経済論叢 7巻4号, 大正7年.
 - 3 河田嗣郎「戦後独逸の社会主義運動」経済論叢, 12巻5号, 大正10年.
 - 4 藤井 悌「ドイツ労働組合の統一運動」社会政策時報, 16号, 大正10年.
 - 5 稲垣守克「独逸平和主義運動について」国家学会雑誌, 34巻4号, 大正10年.
 - 6 河田嗣郎「戦後独逸の社会主義運動」経済論叢, 12巻6号, 大正10年.
 - 7 猪俣津南雄「新独逸の共産主義運動」表現, 2巻10号, 大正11年.
 - 8 赤木朝治「現時独逸の社会運動」警察協会雑誌, 267号, 大正11年.
 - 9 井口孝親「独逸労働階級の共同戦線」我等, 4巻5号, 大正11年.
 - 10 野坂 鉄「新独逸の新しい労働組合運動」表現, 2巻10号, 大正11年.
 - 11 名倉聞一「独逸の労働組合」東方時論, 7巻2号, 大正11年.
 - 12 安井英二「大戦後に於ける独逸の社会運動」法政新誌, 19巻2号, 大正11年.
 - 13 青木節一「最近独逸に於ける労働組合運動」社会政策時報, 40号, 大正13年.
 - 14 水上鉄治郎「ドイツ社会主義運動の近況」社会政策時報, 57号 大正14年.
 - 15 協調会訳, (独) ネストリープケ著「独逸労働組合運動史」大正14年.

- 16 田中九一「インターナショナル統一問題と各国労働組合の態度」改造, 8巻6号, 昭和1年.
- 17 小泉信三「第2・第3インタナショナル」財政経済時報, 14巻1号, 昭和2年.
- 18 水上鉄治郎「改良派インターナショナル危機」社会政策時報, 85号, 昭和2年.
- 19 岡 義武「環境に関連して観たる19世紀末の独逸の民主主義運動」国家学会雑誌, 42巻3号, 昭和3年.
- 20 田中九一「労働及政治——第2インタナショナル大会の二問題」我等, 10巻10号, 昭和3年.
- 21 山川 均『インタナショナルの歴史』社会科学叢書第20編, 日本評論社, 昭和4年.
- 22 吉川末次郎「第2インターナショナルの植民政策」国際知識, 10巻8号, 昭和5年.
- 23 遠藤一郎訳, ポストゲート著『インターナショナル発達史』白楊社, 昭和6年.
- 24 百々己之助「独逸に於ける労働組合と政党との関係」経済集志, 5号3, 4号, 昭和7年.
- 25 西本 喬「独逸の政情を繞る左右両インターナショナルの統一問題」社会政策時報, 135号, 昭和8年.
- 26 吉村 励「ドイツ労働運動史の一視角 (思潮) ——猪木正道氏による歴史の歪曲——」経済学雑誌, 24巻4号, 昭和12年.
- 27 鮎沢 巖「インターナショナルの過去と現在」労働評論, 1巻2号, 昭和21年.
- 28 鮎沢 巖「革命主義か改良主義か」労働評論, 2巻2号, 昭和21年.
- 29 林 健太郎「ドイツに於ける社会主義運動史研究の回顧」史学雑誌, 60巻6号, 昭和26年.
- 30 池上幹徳・佐藤重雄訳, Warnke, H. 著『ドイツ労働組合運動小史』国民文庫, 昭和29年.
- 31 安井二郎「大恐慌とドイツ労働組合」フェビアン研究, 6巻2号, 昭和30年.
- 32 飯田 鼎「ドイツ社会運動史にかんする最近の資料 (1)」三田学会雑誌, 52巻4号, 昭和34年.
- 33 飯田 鼎「ドイツ社会運動史にかんする最近の資料 (2)」三田学会雑誌, 52巻10号, 昭和34年.
- 34 西尾孝明「ドイツ社会民主党と自由労働組合組——組織統合過程における改良主の抬頭」政経論叢 (明大), 28巻3号, 昭和34年.
- 35 レピンスキー (Lepinsky, F.)「ドイツ労働組合運動の歴史 (上・下)」自由労連, 5巻7号, 昭和35年.
- 36 西尾孝明「ドイツ社会主義組織運動の挫折」法学新報, 67巻6号, 昭和35年.
- 37 飯田 鼎「1905年—1907年の第1次ロシア革命のドイツに及ぼした影響——ドイ

- ツ社会運動史にかんする最近の資料（3の1～2）——」三田学会雑誌，53巻1，2号，昭和35年。
- 38 飯田 鼎「1890年から1914年にかけてのドイツ労働運動における若干の問題——W. バルテルの批判——」三田学会雑誌，54巻7号，昭和36年。
- 39 中村菊男「戦前における社会主義および共産主義運動1，2」海員，9巻8，9号，昭和37年。
- 40 中村菊男「戦後における社会主義および共産主義運動1，2」海員，9巻10，11号，昭和37年。
- 41 喜安 朗「第2インターナショナル——その現実認識の性格——」『世界の歴史15，帝国主義』所収。筑摩書房，昭和37年。
- 42 花見 忠「ドイツにおける労働組合と政治——第1次大戦まで（1—2）——」日労協雑誌，48巻49号，昭和38年。
- 43 吉村 励「ドイツ労働運動史の一断面——赤色労働組合主義批判——」生活保障の経済理論——近藤文二博士還暦記念論文集所収。東京日本評論新社，昭和38年。
- 44 島崎晴哉『ドイツ労働運動史——根源と連続性の研究——』青木書店，昭和38年。
- 45 花見 忠『労働組合の政治的役割，ドイツにおける経験』未来社，昭和40年。

d 社会民主主義

- 1 吉野作造「民本主義と社会民主主義」社会及国体研究録，2巻7号，大正10年。
- 2 武藤丸楠訳，ヴァルガ著『社会民主主義諸政党』（マルキシズム叢書第21冊）弘文堂，昭和4年。
- 3 黒部 明訳，ヴァルガ著『社会民主主義諸政党』希望閣，昭和4年。
- 4 プハーリン「社会民主主義の本質およびその社会的根源」社会問題研究，90号，昭和4年。
- 5 マギアール「経済恐慌と社会民主主義（上・下）」批判，1巻2，3号，昭和5年。
- 6 吉村 励「社会民主主義の変化と批判（研究）」経済学雑誌，28巻1，2号，昭和12年。
- 7 河合栄治郎「議會主義か独裁主義か」経済往来，9巻3号，昭和14年。
- 8 佐野 学「ブルジョア民主主義と革命的民主主義」潮流，1巻1号，昭和21年。
- 9 佐野 学『民族と社会主義——国民前衛党の主義主張及び綱領』協同出版社，昭和21年。
- 10 服部英太郎「ドイツ社会民主主義——西欧民主主義」『現代社会思想講座2』所収。昭和26年。
- 10 吉村 励「第2次大戦後の社会民主主義の役割」経済評論 6月号，昭和28年。
- 11 猪木正道「社会民主主義の成立と発展——ドイツ・オーストリアを中心として——」『岩波講座，現代思想4 新しい社会』社会民主主義1，所収。岩波書店，昭和32年。

- 12 石上良平「現代の社会民主主義の思想——イギリスの場合——」『岩波講座，現代思想 4 新しい社会』社会民主主義 2，所収。岩波書店，昭和32年。
- 13 衣笠哲生「レーニンの『社会民主主義論』」政治研究，7号，昭和34年。
- 14 丸尾直美「社会民主主義の労働階級窮乏化理論」三田学会雑誌，59巻 9号，昭和39年。
- 15 関 嘉彦「社会民主主義の基礎理念」社会思想研究，12巻 1号，昭和40年。
- 16 蠟山政道「民主社会主義への道」『蠟山政道評論著作集 2』所収。中央公論社，昭和40年。
- 17 和田耕作「社民党・労働党の動向と民主社会主義」労働問題，22号，昭和40年。
- 18 山本正治郎「社会民主主義とファシズム——社会民主主義の社会ファシズムへの転生と左翼社会民主主義の発生について——」研究と資料，10号，昭和40年。
- 19 猪木正道『民主的社会主義』中央公論社，昭和40年。
- 20 猪木正道『民主社会主義とはなにか』民主社会主義研究会編，現代教養文庫，社会思想研究会出版部，昭和40年。
- 21 吉村 励「社会民主主義の帝国主義論」赤松要・堀江薫雄・名和統一・大来佐武郎監修『講座国際経済 5 帝国主義と後進国開発』所収。有斐閣，昭和42年。
- 22 猪木正道『社会思想入門』有紀書房，昭和42年。
- 23 大島 清「社会民主主義と社会ファシズムについての覚え書」資料室報（大原社研），93号，昭和43年。

e ドイツ革命

- 1 木村久一「独逸に於ける革命の可能性」大学評論，2巻 5号，大正 7年。
 - 2 浮田和民「独逸の革命と大戦終局の意義」太陽，24巻14号，大正 7年。
 - 3 浮田和民「独逸の革命」大阪朝日新聞，11巻1822号，大正 7年。
 - 4 外務省臨時調査部編『革命後の独逸事情』同部，大正 8年。
 - 5 外務省臨時調査部編『独逸革命事情摘要』同部，大正 8年。
 - 6 浮田和民「独逸革命前史及革命の顛末」外事彙報，4，5号，大正 8年。
 - 7 社説「独逸の反動革命」神戸新聞，3月16日，大正 9年。
 - 8 宇都宮 鼎「過激化しつつある独逸」太陽，26巻 7号，大正 9年。
 - 9 五来素川「独逸革命前の情報」仏蘭西時報，101号，大正 9年。
 - 10 社説「独逸に起れる反動的革命」大阪朝日新聞，3月16日，大正 9年。
 - 11 社説「独逸革命経過」時事新報，3月18日，大正 9年。
 - 12 占部百太郎「独逸革命の真相に関する史料」三田学会雑誌，14巻 5号，大正 9年。
 - 13 長瀬鳳輔「最近独逸に起れる反動的革命の真相」外交時報，31巻 7号—32巻 8号，大正 9年。
 - 14 宇都宮 鼎「戦後独逸の不安」太陽，26巻 7号，大正 9年。
 - 15 五来素川「独逸社会革命の由来と現状」仏蘭西時報，102号，大正 9年。
- 131 (022)

- 16 阿部秀助「独逸社会主義の二傾向」三田学会雑誌, 12巻11号, 大正9年.
- 17 長瀬鳳輔「独逸反革命運動の真相」外交時報, 31巻370—375号, 大正9年.
- 18 佐野 学「スパルタカス団」表現, 2巻10号, 大正11年.
- 19 グンデルト「独逸国民と過激派」大阪朝日新聞, 1月23, 24日, 大正11年.
- 20 田辺忠男「独逸革命史」財政経済時報, 9巻6号, 大正11年.
- 21 中平 亮「独逸革命の余燼」大阪朝日新聞, 9月5—7日, 大正11年.
- 22 守田有秋「独逸革命及其前後」表現, 2巻10号, 大正11年.
- 23 河上 肇「時機尚早なる社会革命の企について」経済論叢, 15巻4号, 大正11年.
- 24 伊藤正徳「平穩公然と成りし二大革命」東方時論, 7巻12号, 大正11年.
- 25 田辺忠男「独逸革命史」財政経済時報, 9巻6—13号, 大正11年.
- 26 宮本英脩「独逸共產主義者の暴動と其公判」法学論叢, 8巻3号, 大正11年.
- 27 北 吟吉「独逸革命の回顧」改造, 5巻5号, 大正12年.
- 28 日置 益「革命後のドイツ経済状態」経済資料, 10巻10号, 大正13年.
- 29 稲垣守克「独逸共産党の政策」社会政策時報, 55号, 大正14年.
- 30 千葉雄次郎「独逸革命の前」社会思想, 4巻8号, 大正14年.
- 31 千葉雄次郎「二人の革命家 (ドイツ革命夜話)」社会思想, 5巻7号, 大正15年.
- 32 北 吟吉「独逸革命と独逸社会党」祖国, 2巻10号, 昭和4年.
- 33 吉村 励「ドイツ・ボナパルティズムについて (研究) ——ドイツ11月変革の性質問題によせて」経済学雑誌, 25巻5号, 昭和12年.
- 34 ピーク, W.『ドイツ民族解放闘争の諸問題』新時代社, 昭和26年.
- 35 吉村 励『ドイツ革命運動史』青木文庫, 昭和28年.
- 36 大木理人訳, ピーク, W. 著「ドイツ共産党の歴史」青木書店, 昭和29年.
Pieck, W.: Reden und Aufsätze, 2Bde. Berlin 1952. の部分訳.
- 37 篠原 一『ドイツ革命史序説——革命におけるエリートと大衆——』岩波書店, 昭和31年. (参考文献の記載あり)
- 38 村瀬興雄「ドイツ革命史の諸問題——篠原 一『ドイツ革命史序説』によせて」思想, 392号, 昭和32年.
- 39 大野英二・篠原 一「ドイツ革命史序説——革命におけるエリートと大衆——」西洋史学, 34巻83—86号, 昭和32年.
- 40 篠原 一「ドイツ革命における組織論——研究の現状とその批判——」国家学会雑誌, 1・2号, 昭和37年.
- 41 阪上 孝「ドイツ革命と社会化論争」経済論叢 98巻1号, 昭和41年.

f ドイツ事情一般

- 1 吉野作造編『独逸軍国主義』(現代叢書) 民友社, 大正5年.
- 2 森戸辰男「独逸と社会党」外事彙報, 9号, 大正5年.
- 3 湯原元一著『戦時の独逸国民』中央報徳会, 大正5年.

- 4 奥田竹松「戦時及戦後の独逸」中央銀行会通信録, 161号, 大正5年.
- 5 辻 高衡「独依然衰へず」東京朝日新聞, 10月22—24日, 大正5年.
- 6 辻 高衡「戦争の常態の独逸」大阪朝日新聞, 10月26日, 大正5年.
- 7 新渡戸稲造「大戦後に来るべき社会変化の二大傾向」実業之日本 2021号, 大正6年.
- 8 井上竹治「独逸の軍国主義と其民主的傾向」新日本, 7巻5号, 大正6年.
- 9 神川彦松「独逸国民の民主化」外交時報, 26巻5号, 大正6年.
- 10 奥田竹松「大戦乱と独逸帝国の運命」太陽, 23巻7号, 大正6年.
- 11 占部百太郎「大戦前の独逸の政策」三田学会雑誌, 11巻1号, 大正6年.
- 12 吉野作造「媾和に伴ふ独逸の政変」中央公論, 33巻11号, 大正7年.
- 13 長瀬鳳輔「独逸政変の顛末と媾和思潮の真相」太陽, 24巻7号, 大正7年.
- 14 長瀬鳳輔「戦局の前途と独逸の政界」太陽, 24巻11号, 大正7年.
- 15 三瀨信三「戦敗と独逸の将来」太陽, 25巻2号, 大正8年.
- 16 西山重和「独逸敗北の根本的原因」外交時報, 29巻3号, 大正8年.
- 17 宇都宮 鼎「独逸近時の社会事情」社会政策時報, 2号, 大正9年.
- 18 社説「独逸の復辟」神戸又新日報, 3月16日, 大正6年.
- 19 社説「独逸選挙形勢」大阪毎日新聞, 5月4—25日, 大正9年.
- 20 辻 高衡「独逸は斯うして戦って居る」大阪朝日新聞, 10月23, 24日, 大正9年.
- 21 大伴 恭「独逸復興難」我等, 2巻12号, 大正9年.
- 22 名倉聞一「独逸復活の途如何」大阪朝日新聞, 4月22—27日, 大正9年.
- 23 山川 武「独逸に於ける鉱山の社会化」社会政策時報, 2号, 大正9年.
- 24 堀江帰一「生産組織の社会化」改造, 2巻5号, 大正9年.
- 25 館田謙吉「最近独逸海軍事情」国家及国家学, 9巻11, 12号, 大正10年.
- 26 稲垣守克「共産独逸と資本主義連合国との将来の戦争」解放, 3巻11号, 大正10年.
- 27 岡田重次「独逸に於ける経営の社会化に就て」国民経済雑誌, 31巻1, 2号, 大正10年.
- 28 阿部賢一「独逸における産業社会化論」同志社論叢, 4号, 大正10年.
- 29 上田孝三「経済的合理化の極致としての『社会化』」社会政策時報, 14号, 大正10年.
- 30 高橋桓二郎「独逸の社会改造の事業」表現, 2巻10号, 大正11年.
- 31 大内兵衛「資本主義国家の一掃着点 (独逸戦後の経済状態)」大原社会問題研究所パンフレット, 1号, 大正11年.
- 32 宮本英脩「暗殺された独逸外相ラテナウ氏の人物と思想」表現, 2巻9号, 大正11年.
- 33 社説「最近の独逸」神戸新聞, 8月24—26日, 大正11年.

- 34 石川安次郎「独逸の将来」外交時報, 35巻12号.
- 35 広井辰太郎「独逸復辟の可能性」外交時報, 36巻6号, 大正11年.
- 36 守田有秋「1922年の独逸」解放, 4巻12号, 大正11年.
- 37 長瀬鳳輔「新独逸の軍備と国際関係」表現, 2巻10号, 大正11年.
- 38 「革命後の独逸に於ける社会化の努力」経済資料, 8巻2号, 大正11年.
- 39 社説「独逸の反対運動」大阪朝日新聞, 4月15日—5月1日, 大正12年.
- 40 高木信威「独逸の危機」大阪朝日新聞, 10月6日, 大正12年.
- 41 北 吟吉「最近の独逸国情」財政経済時報, 10巻20号, 大正12年.
- 42 両角 傳「最後の決勝まで抵抗を持続すると独首相の演説」中央商業新報, 5巻7—10号, 大正12年.
- 43 社説「独逸の政局」大阪朝日新聞, 11月27日, 大正12年.
- 44 社説「新ドイツの内閣」東京日々新聞, 12月4日, 大正12年.
- 45 河瀬蘇北「独逸の現状と仏蘭西」日本及日本人, 40号, 大正13年.
- 46 池田林蔵「独逸の反動運動と秘密結社」外交時報, 474号, 大正13年.
- 47 高橋清三郎「独逸から観た独逸の政状」大阪朝日新聞, 3月22—27日, 大正13年.
- 48 「独逸の総選挙」東京朝日新聞, 4月24日, 大正13年.
- 49 社説「独逸の議会解散」大阪毎日新聞, 10月22日, 大正13年.
- 50 社説「ドイツ議会解散」東京日々新聞, 10月23日, 大正13年.
- 51 稲垣守克「独逸の政情」法律及政治, 3巻12号, 大正13年.
- 52 社説「独逸総選挙の成績」大阪毎日新聞, 12月10日, 大正13年.
- 53 黒田礼二「独逸国粋党の現状」大阪朝日新聞, 6月17—20日, 大正13年.
- 54 高岡熊雄「独逸の復興問題に就て」中央公論, 39巻3号, 大正13年.
- 55 八木沢善次訳, J. M. Clark「経済社会化論」法学新報, 34巻10—12号, 大正13年.
- 56 吉田 蓁「ドイツに於ける工業社会化運動」社会政策時報, 44号, 大正13年.
- 57 桑田熊蔵「独逸と産業公有制度」国家学会雑誌, 38巻10号, 大正13年.
- 58 高橋貞樹「独逸社会主義の消長」マルクス主義, 1巻6号, 大正13年. 2巻1号, 大正14年.
- 59 板倉卓造「独逸の帝政思想と共和思想」龍門雑誌, 438号, 大正14年.
- 60 社説「ヒンデンブルグと独逸」大阪時事新報, 4月10日, 大正14年.
- 61 板倉卓造「独逸議会解散前の政情」海外時報, 18号, 大正14年.
- 62 社説「独逸大統領の選挙」大阪毎日新聞, 4月28日, 大正14年.
- 63 社説「ヒ元帥当選」神戸新聞, 4月28日, 大正14年.
- 64 社説「ドイツ大統領」東京朝日新聞, 4月29日, 大正14年.
- 65 社説「ドイツ新大統領」東京日々新聞, 4月29日, 大正14年.
- 66 松原一雄「ヒンデンブルグ出廬の意義」太陽, 31巻9号, 大正14年.
- 67 米田 実「ヒンデンブルグ大統領の起立事情と今後の独逸政局」中央公論, 40巻6号, 大正14年.

- 68 高木信威「ヒンデンブルグ当選」外交時報, 491号, 大正14年.
- 69 石浜知行「ジョーレスの撃たれるクロアサンの酒場」社会思想, 4巻5号, 大正14年.
- 70 三並 良「独逸共和国の成立まで」外交時報, 43巻506号, 大正15年.
- 71 宮田喜代蔵「社会化に就て」商業経済論叢, 4巻, 大正15年.
- 72 伊藤兆司「共和独逸の内地植民政策に就て」農業経済研究, 2巻1号, 昭和1年.
- 73 嘉治隆一「ケルン共産党事件の真相」我等, 8巻4号, 昭和1年.
- 74 ブハーリン「ドイツ問題について」社会科学, 3巻3号, 昭和2年.
- 75 伊藤兆司『独逸の内地植民政策』農林省農務局編 帝国耕地協会出版, 昭和3年.
- 76 簡牛凡夫「独逸に於ける内地植民問題(1—4)」帝国農会報, 18巻7—10号, 昭和3年.
- 77 有川治助「独逸の植民地回復運動」外交時報, 48巻4号, 昭和3年.
- 78 菅原友親「支那に於ける独逸の経済的進出」国際知識, 8巻1号, 昭和3年.
- 79 大森義太郎「コミニズムとファシズムの新たな対立」日本評論, 11巻11号, 昭和3年.
- 80 黒田礼二「独逸の政党に関する私観」外交時報, 49巻1号, 昭和4年.
- 81 太田雅一「伯林共産党の暴動に就いて」外交時報, 51巻4号, 昭和4年.
- 82 C. F. メルヴィル「独逸の外交政策」外国の新聞と雑誌, 196号, 昭和4年.
- 83 安孫子理兵衛「独逸外相ストレーゼマン」外国の新聞と雑誌, 205号, 昭和4年.
- 84 森田広之助「北満に於ける独逸の経済的勢力」満鉄哈爾濱事務所, 昭和5年.
- 85 安孫子理兵衛訳, コッホ・ウェザァ著「戦後の独逸外交政策」日本読書協会会報, 113号, 昭和5年.
- 86 長岡春一「独逸の外交」外交時報, 56巻1号, 昭和5年.
- 87 圓地與四松「ストレーゼマン死後の独逸外交」外交時報, 53巻3号, 昭和5年.
- 88 黒田礼二「廢帝前後」中央公論社, 昭和6年.
- 89 十河佑貞「フランス革命とドイツに於ける反革命思想」史宛, 6巻6号, 昭和6年.
- 90 向坂逸郎「独逸共産党と指導者テールマン」改造, 14巻10号, 昭和7年.
- 91 田中 力訳, フランチェスコ・ニッティ著『ボルシェビズムとファシズムと民主主義』日本評論社, 昭和8年.
- 92 河合榮治郎『ファシズム批判』日本評論社, 昭和9年.
- 93 向坂逸郎「ヒットラー政権の確立へ——ヒンデンブルグの死とドイツの政治——」中央公論, 49巻10号, 昭和9年.
- 94 新道正道「独逸国民革命の政治的経済的均制」外交時報, 71巻1号, 昭和9年.
- 95 森吉義旭「独逸におけるマルキシズムの没落とナチスの勝利」外交時報, 73巻6号, 昭和10年.

- 96 ズムバルト「独逸社会主義」日本読書協会々報, 170号, 昭和10年.
- 97 G・ライマン「ドイツ——世界帝国か世界革命か」国際文化協会々報, 43号, 昭和11年.
- 98 田中直吉「ドイツの植民地獲得と国際的葛藤 (一)」公法雑誌, 4巻10号, 昭和12年.
- 99 岡本修助「前大戦後の独逸文学概観 (研究)」経済学雑誌, 17巻1・2号, 昭和12年.
- 100 木本幸造「フリードリヒ・マイネケ著 矢田俊隆訳『ドイツの悲劇』(書評)——考察と回想——」経済学雑誌, 27巻1, 2号, 昭和12年.
- 101 ゲー・クルト・コハンセン博士, ハインリッヒ・フラフト共著『独逸植民地問題』横浜正金銀行編, 昭和13年.
- 102 伊東 敬「旧独植民地問題と英国の態勢」国際知識及評論, 18巻7号, 昭和13年.
- 103 大原社会問題研究所訳編, 米国産業協議会著『国民社会党下に於ける独逸の労働及び経済』栗田書店, 昭和13年.
- 104 前田稔清「独逸の植民地問題」経済論叢, 47巻6号, 昭和14年.
- 105 田中直吉「ドイツの植民地獲得と国際的葛藤 (二・完)」公法雑誌, 4巻11号, 昭和14年.
- 106 P. V. グレゴアル「独逸の東方植民」日本読書協会々報, 217号, 昭和14年.
- 107 A. シドープル「ドイツは何故植民地を要求する?」国際文化協会々報, 53号, 昭和14年.
- 108 難波紋吉「ドイツとユダヤ人」国際事情, 543号, 昭和14年.
- 109 W・フォン・シェーン「ドイツ植民地の回顧」国際文化協会々報, 74号, 昭和14年.
- 110 関口 泰「独逸の旧植地」東洋経済新報, 1927号, 昭和14年.
- 111 加田哲二「独逸の新帝国主義」日本評論, 15巻7号, 昭和14年.
- 112 大石義雄「国民社会主義ドイツ労働党の国家機構に於ける地位について」内外研究, 13巻1号, 昭和14年.
- 113 加田哲二「少数民族問題——ヨーロッパにおける少数民族としてのドイツ人問題」三田学会雑誌, 34巻3号, 昭和15年.
- 114 法貴三郎訳「世界大戦を語る——ルーデンドルフ回想録」朝日新聞社, 昭和16年.
- 115 四宮恭二「国民革命と独逸労働者階級の運命」経済往来, 9巻5号, 昭和17年.
- 116 柳川 昇「前大戦後のドイツに於ける社会化運動」経済評論 1巻5号, 昭和21年.
- 117 小此木真三郎『ファシズムの誕生』青木書店, 昭和26年.

- 118 篠原正瑛「民主主義か共産主義か? —— 苦悩する二つのドイツの対決」理想, 216号, 昭和26年.
- 119 村瀬興雄『ドイツ現代史』東京大学出版会, 昭和29年
- 120 江杉栄一「ドイツ民主主義とワイマル共和制——共和制の成立をめぐる序説的考察」同志社法学, 30号, 昭和30年.
- 121 安藤英治「ドイツ資本主義の後進性と悲劇——資本主義のロゴスとファシズム」思想, 377号, 昭和30年.
- 122 加藤俊平「ドイツにおける労働協約の一般的拘束力宣言制度の成立過程——1918年12月23日『協約令』の成立過程を中心として」立命館大人文紀要 6号, 昭和34年.
- 123 谷村 璋訳, プトリッツ (Puttitz, W. G. Z.) 著『ドイツ現代史——元外交官の思い出』現代史双書7号, みすず書房, 昭和35年.
- 124 松隈徳二「19世紀から第1次世界大戦までの国際政治民主化のための運動」法政研究, 26巻3号, 昭和35年.
- 125 熊谷一男「ドイツ貿易政策の変遷——1800年~第1次大戦まで」世界経済評論, 81号, 昭和36年.
- 126 西川正雄「ドイツ現代史史料概観(2)——いわゆる押収ドイツ文書を中心として」史学雑誌, 72巻6号, 昭和38年.
- 127 林 健太郎『ワイマル共和国——ヒトラーを出現させたもの』中公新書27, 中央公論社, 昭和38年.

IV おわりに

運動の発展は、与えられた歴史的状況における矛盾の展開形態・その移行の形態の徹底した追究なくしてはありえないであろう。

ルクセンブルク思想と行動を理解するための端緒を「I はじめに」で定めたが、そこで問題となる点を箇条書きし、今後の指針としたい。

1, 自然発生的性格を有する大衆ストライキの実証分析。

2, ルクセンブルクは、大衆ストライキをどのように理解したか。かつ、社会民主党内で修正派に対する闘争をどのような視点から行ったか。

3, 社会民主党急進派の立場から大衆に対する働きかけをどのように行ったか。

以上3点をふまえて、最終的にはルクセンブルク思想を、社会主義思想史の中に位置づけるなければならない。そうしたときに、ルクセンブルクの全体像は、新しい生命のもとに、今日の日々に語りかけるであろう。

注(1) 西川正雄「ローザ・ルクセンブルクとドイツの政治」, 史学雑誌, 69編2号, 46ページ.